

ア 農薬使用上の注意事項

(ア) 農薬使用上の注意事項（水稻 殺虫剤・殺菌剤）

項目	内容
水稻の種子消毒	<ol style="list-style-type: none">1 種子消毒を行う前に必ず塩水選を行い不良粒を除去する。2 消毒後は、水洗しない（水洗いすると消毒効果がなくなる）。3 風乾が必要な剤は処理後必ず風乾し、薬剤を十分固着させる。（イネシンガレセンチュウを消毒する場合、風乾により死亡率が高まる。）4 種籾はバラ潰とする（布袋等薬液の通りが悪いものへ入れての消毒は行わない）。5 種子消毒中の温度管理に注意する。6 種子消毒後の浸種は、流水中並びに河川、湖沼及びため池では行わない。 また、使用済み薬液は河川等へは流さず、産業廃棄物として適正に処理する。
水稻の育苗箱施用	<ol style="list-style-type: none">1 育苗箱施薬剤は、本田での水面施用はしない。2 次に該当するほ場では、一般的に薬害が生じる恐れがある。<ol style="list-style-type: none">(1) 砂質土壌、漏水過多、生わらなどの未熟有機物の多用、強還元土壌など苗の活着や根張りの悪い田(2) 軟弱徒長苗、むれ苗、老熟苗(3) 移植後に低温が続き、苗の活着遅延が予想される場合(4) 移植後に極端な高温(30℃以上)により、植え傷みが予想される場合3 養魚田及び付近の水田、養魚池等に田水が流れ込む恐れのあるところでは使用しない。また、使用した育苗箱は、養魚田、養魚池その他魚介類に影響を及ぼす恐れのあるところでは洗浄しない。4 薬剤が茎葉に付着すると薬害が生じやすいので、苗がぬれている場合は、葉の水滴を払い落としてから散布する。散布直前にはかん水しない。5 育苗箱の床土が乾燥していると薬剤が落下して効果が低下するので、散布直後は軽くかん水する。6 田面を露出させると薬害を生じやすくなり、また、掛け流しをすると効果が低下するので、移植後は直ちに水深2～3cmに

	<p>湛水する。</p> <p>7 不均一な代かき、極端な浅水や深水、深植えは、苗の生育に悪影響を及ぼし、薬害を生じやすくなるので行わない。</p>
抵抗性誘導剤	<p>抵抗性誘導型のいもち剤を含む箱施用剤は、いもち病の発生しやすい6月以降の施用では効果が劣る場合があるため注意する。</p>
薬剤耐性・抵抗性	<p>1 Q o I 剤（ストロビルリン系薬剤）耐性イネいもち病菌の発生が、他県において報告されている。耐性菌の発生リスクを低減させるため、次の事項に注意する。</p> <p>(1) 種子は毎年更新し、塩水選と種子消毒を行う。</p> <p>(2) Q o I 剤は最大でも年1回の使用とし、体系防除を行う場合は、作用性の異なる剤と組み合わせ、連用は避ける。</p> <p>(3) 育苗箱処理の薬剤は、耐性菌の発生リスクの低い薬剤を選択する（長期持続型Q o I 剤の育苗箱処理は、耐性菌の選択圧を高める恐れがある）。</p> <p>やむをえずQ o I 剤を育苗箱処理する場合は、1年もしくは2年毎に作用機構の異なる薬剤とのローテーションで使用する。</p> <p>(4) 採種ほ及びその周辺ほ場では、Q o I 剤の使用は避ける。</p> <p>2 ウンカ類の薬剤抵抗性の発達が報告されている。次の事項に注意し、防除に重点を置く種を中心に効果的な薬剤を選ぶこと。</p> <p>(1) トビイロウンカは、イミダクロプリド、チアメトキサム、クロチアニジン、ブプロフェジンへの抵抗性発達の可能性がある。</p> <p>(2) セジロウンカは、フィプロニルへの抵抗性発達の可能性がある。</p> <p>(3) ヒメトビウンカは、九州などの西日本ではフィプロニルとイミダクロプリドへの抵抗性発達の可能性がある。</p>

注 農薬登録は令和6年1月現在